

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと、風

第98号（2014年7月）

風に吹かれて（76）

白井啓治

『いつか見た空 今日この空』

風は変わらず吹いておる』

日々のテレビニュースや新聞をみてため息の出来ない日はない。憂国などという言葉を使うと、古い時代遅れの右翼のように思われそうだが、実際のところこの国はいつたい何処へ向かおうとしているのだろうかと思ひ、本気にため息が出てくる。

集団的自衛権、なぜそんなに急ぐ。国を、国民を守るなんてことを言っても、その時に自分が出ていく訳ではないだろうに。新聞のコラムに剣花坊の川柳が出ていた。

「暖室に酒呑みながら主戦論」

戦争に行かないで済む者達が、国防を口にして果たしてそれでいいのか、と川柳は笑っている。

国防とは違うが、以前に随分とお世話になった某社の社長が、「白井君、金を儲けるためには貧乏人から搾取することを考えないとだめだ。搾取なんて嫌な言葉だが、金持ちというのは金を使わないから金持ちなんだ。逆に金を使ってしまうから貧乏するといえる」と教えてくれた。肴は何でも一皿百円のチェーン酒場の流行り始めたバブル崩

壊の頃であった。

「農家に直接買い付けに行つて、農協に出せない野菜を買い込んで来れば、また漁協で売り物にならない魚をタダ同然に仕入れてくれば百円で売つても大きな利益を生む。しかも、客は安い安いと三品も四品も注文してくれる。不良品を売るわけじゃない。それこそとれたて新鮮だ。勿論、買い付けなどいろいろ問題を解決しなけりやならないけどな」と。

川柳にうたわれたように、正に大上段に天下国家をうたつて憲法解釈をゆがめて法案を通してそこにあるのは弱者が竹槍もつて死に行くことを求めているに過ぎないといえる。貧乏人から搾取して金を儲ける、貧乏人だからこそ、金を使うと何処かよく似ている。

そうかと思えば、東京都議会での情けなすぎる野次とその後の行動。こんなの都議会に関わらずどこでも似たり寄つたりのことが起つているのだろうことが、容易に想像できる。

議員の資格なしといえはその通りである。しかし、それを当選させたのは言うまでもなく選挙民である我々である。多数決で選ばれたのだから、自分がその人に投票しなくても、投票したと同じ事なのである。

民主主義の多数決とは、自分が投票あるいは賛

成しなくても、多数の決で選ばれた者、決まった事案は、自分が選出あるいは決めた事になる。反対票を投じたからといって、それが投票権者としての、結果への免罪符にはならないのだ。
東京都民は、情けないヤジを飛ばした議員を選んでしまったという反省をしなければならぬだろう。わが県茨城でも、わが市石岡でもそれは同じことである。

ふるさと風の会会員募集中!!

会報「ふるさと風」も、お陰様で今年9月には創刊100号を迎えます。ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

議員は何かにつけて、我々は国民、市民の負託を受けてというが、負託されたのは数は力の駒になつて部分最適を行う為ではなく全体最適を行うためだということを感じておいてもらいたいものだ。当然のことその負託は投票民の手によつて取り下げられるものだから。

選挙民も、そろそろ棚から牡丹餅を願うように、何かをやつて貰う為に選挙をするのではなく、自分達の望んでいる「あるべき姿」を実行させるために選挙しなくてはならない。とんでもない議員を非難する前に選挙民としての自分自身を反省することが必要であらう。

『内憂と外患』(2)

菅原茂美

前月号では個人としての「内憂と外患」について、言わば自分史的に長々と述べた。人は知らず我が身を振り返り、内や外に良くもこれだけ多くの「鬼」が住むものと驚かされた。

さて今月は、個人ではなく国家が抱える「内外の鬼」について触れてみたい。

まず日本という国家が抱える内なる最大の「憂いごと」は、巨大な借金であろう。その額は基準の取り方や定義の仕方で一様ではない。いずれにしろ国と地方を合わせて1千兆円超。国民一人につき借金額はほぼ八百万円。借りた金は必ず返すほかあるまい。幸い、国債などその多くは、日本国民が購入しており、外国からの借金はそれほど多くはない。いわば、親が息子に金を借りているようなもの。とはいえ、これからどのようにして

国家を運営していくのか心配だ。こんな田舎の庶民が…と言われるかもしれないが、国民一人一人に切迫感がなければ借金は解決しない。

さて、借金大国の日本の将来について、はっきりしていることは、今後、税金など納付する額は必ず高くなり、年金や福祉など受給額は確実に下がっていく事だろう。北欧の消費税25%など、我が国でもありうる話。なけなしの年金から税金・介護保険料・健康保険料などガバゴボ引かれ、ただ事ではない。長生きなどしていると新税として「長寿税」などこつそりとられるかも…。

年金受給開始年齢は60歳↓65歳↓そのうち、70歳? 気の利いた人は、サッサと死ぬほかないか? 私など、先はそんなに長くはないので、まあ何とかなるだろうと、高をくくっているが、今、年金を積み立てている現役世代が年金受給年齢になる頃は、世の中一体、どうなっている事やら。若い世代に負の遺産を押し付けるこれまでの無責任な国家運営方法は、あまりにも酷すぎる。これからは自己防衛で、若い人はしっかり個人年金に加入しておく必要があるそう。

日本のGPIF(年金積立金管理運用独立行政法人)は120兆円という世界最大級の預金額を預かっている。これを、日本国債購入費60%、国内株式投資12%に運用が制限されているが、労働人口が減り、高齢者が増えたと年金受給バランスが崩れるので、リスクの高い株式投資の割合を増やすよう検討中とか。何とか株で儲けて、積立金を安くし受給額を増やしてほしい。

報道によると、ヨーロッパ中央銀行への市中銀行の預入金に対して、「マイナスの金利」が検討されているという。理由は、市中銀行が企業などへ

の貸し出しを促進するためという。私は以前、国の財政立て直しのため、いつの日か国民の預金にマイナスの金利をかけ、国の借金返済に充てる時代が来るのではないかと夢想した事がある。現在国民の総預金額は1400兆円というから、1%のマイナス金利とすれば、国は毎年14兆円を借金返済に充てる事ができる。国民は預金すれば必ず目減り。背に腹は代えられず…。おー怖い怖い。では一体、なにがいけなかったのか?

それはあまりにも不要不急の巨大事業を、国はやり過ぎた…と言える。それが本場に国民のためになるのか? 焦眉の事案は、あまりにも多過ぎる…と日頃感じていた。

例えば国営諫早湾干拓事業の潮受け堤防排水門。1986年着工。延長7・05kmの潮受け堤防の鉄壁(水門)で、35000鈔を干拓、農地造成。ところが佐賀県漁民は、不漁原因は堤防にあるとして、佐賀地裁に工事差し止め提訴。2004年8月、差し止めの判決が出た。すると長崎農民は堤防がなければ塩害が起きるとして、福岡高裁に佐賀地裁の工事差し止め判決の取り消しを起訴。裁定。その結果、早速工事再開。2007年11月完工。ところが、2014年4月、佐賀地裁は、開門しない場合1日49万円の制裁金を国は漁民に支払うよう判決を下したが、同年6月4日、長崎農民は、開門した場合1日当たり同額の49万円を農民(49人)に支払うよう「間接強制*1」で裁定した。開門した場合、制裁金総額は2500億円。(*1「間接強制」とは、民事執行法に基づき、一定の制裁金支払いを命じ、心理的圧迫を加え、判決や決定等を守らせる強制執行の一種)

さて大変な事になった。国は水門を開けば制裁

金。閉めても制裁金を支払わなければならない。ならば、なぜこんな事業を実施したのか？

♪どうすりやいのさこの私。夢は夜開かない。嘆いてももう遅い。早速国は、福岡高裁に、抗告したが、結果はなんと出るか。菅官房長官は、どちらか一方の立場に立つ事はできないと述べた。一体、このような揉め事はなぜ起きたのか？

事の始まりは、戦後食糧難を解決するために農地を造成する発想が起源である。秋田県の八郎潟(日本第2の湖・1957年以降その8割48平方kmを干拓)も同じ事。戦後の食糧難時代を知る人には理解できる発想である。しかし、時代は変遷し、確かに食料自給率(ほぼ40%)は真に低く、独立国の体をなしていない。けれども食生活の多様化で、「米」の消費は、伸びるどころか、むしろ減少傾向に変遷。そのような時代背景でも、あのような巨大プロジェクトを何が何でも推し進めなければならなかったのか。国が借金まみれというのに、緊急を要する必須の事業とは言えなかったのではないか。しかも現在、耕作放棄の面積は40万畝と巨大。滋賀県の総面積に同じ。主として後継者不足が原因。そんなこと見通せたはずだ。一家の家計に置き換えて考えれば、借金まみれなら、ここは、高級の新車ではなく、中古車か、オートバイで、我慢すべきところではなかったのか。国益よりも、省益を優先する体質：と国民から厳しい批判を浴びても仕方あるまい。

各省庁の役人は、巨大事業を企画し、省庁内の内部審査を無事通過し、委員会に根回しをし、更に国会で予算審議を勝ち取る理論武装ができれば、起案役人は、仕事のできるヤツということで、出世街道まっしぐら。国益よりも省益優先。巨大事

業には、往々にしてこのような背景が見え隠れする。それゆえ、不急不要の巨大事業に巨費を投じ過ぎた！こんな現象の積み重ねが、今日の巨大借金を生み出した背景と思われる。煎じ詰めてものを考えれば、行政府がどんな企画をしようが、予算を審議する国会がしっかりといていれば、国の将来に憂いを残すこんな決断はしなかった筈。どんな利権が絡むかしらないが、巨大な事業費の裏には何かがあるとしか思えない。一般会社なら、赤字を出した経営者は、自腹で補填責任もありうる。国会議員は、その覚悟で議決したのであるうか？となると、そのような「族議員」を選んだ我々国民に最終責任があると言われれば、そうではないとは言えない。要するに、選挙の一票が如何に重大かということである。

1980年、鈴木善幸内閣は、「増税なき財政再建」を掲げ、財政支出を徹底して抑えたら、対抗勢力から、何も仕事ができない無能内閣：と批判を浴びた。国の借金を案じ、極力財政出動を抑えれば、仕事が出来ないように見えるかもしれないが、国は金がないのなら高級新車を諦め、中古車で我慢すべきところを対抗勢力からは、無能内閣と揶揄(やゆ)される。借金のためには隠忍自重やむを得ずなのだが、出世街道を走りがる連中は、無能呼ばわりして慎重内閣の足を引っ張る。醜い輩が跋扈する。鈴木内閣は、こんな政敵や官僚を抑え込み、信念どおり自重を続けていけば、国の借金はこんなに膨らまずに済んだものを：と、今更悔やまれる。要するに、歴代、オレの内閣の時代に、あれもやった、これもやったと自慢した結果が、今日の借金大国の原因と考える。

私は県庁で予算要求の交渉中、県の財政課の担

当から、『新しいアイデアは出さないでくれ！誰にも無能と言われようが、最小限度に抑え、前年通りで要求をしてくれ！』と言われた事がある。私も若気の至りで、エリートの財政担当に理論武装で負けてなるか：という気概があった。「家畜衛生」という面で、存分の予算を獲得し、県民のために貢献したいという強い願いがあったが、しかし、県は財政赤字で青息吐息。無い袖は振れない。どんな聖域も許されない。無いものはない。富遣いの悲しさ。涙をのんだ思いもある。

そんなこんなで、子孫に負の遺産は相続できない。本来、自分の時代に背負った借金は、自分で清算するのが常識。次世代に先送りなど許される事ではない。いい加減この辺で国民は借金解消に向け本気になるべきである。そのためには、まず国会議員は自ら数を減らし、「院」の数を減らし、歳費を減らすべきだ。国会が範を垂れたら、自然と右習え。あらゆる面で自重自粛。借金返済に回すべきである。奮勇を奮って意識改革が必要だ。

日本得意の科学技術立国。後発国に真似できない高度の技術を発展させ、産業を伸ばし、税収を上げ、まず借金を減らす事。何はさておきこの事に全力投球すべきである。国民も我慢する時は、思いっきり我慢して、少々の社会保障は犠牲にする。国民は国家財政を家計と同じに考え、一家が生き残るためには、今、何が一番大事かをよく考える事だ。家計のため、罪なき子供まで道連れに、一家心中など絶対にあってはならない事だ。

このほか、国家が抱える喫緊の内憂問題。それは大都市へ政治・経済等、一極集中問題。直下型巨大地震と津波。更に火山噴火などが同時多発したら、大都市の機能麻痺は必定。交通機関・情報

網。生活ラインの寸断。物流の遮断。これらはかなり高い確率で襲って来る可能性がある。これらの対策を早急に樹立する必要がある。

【その他「内憂」として、順不同だが、*少子高齢化*原発問題と電力安定供給*福島島の放射能汚染除去*生活習慣病など医療費の増大*食糧自給率低下*労働人口減少*地方の過疎化と疲弊*農地の耕作放棄*小中高大とも学力低下*所得格差：など、数え上げたらきりが無い。紙幅の関係で、これらに触れることは、今回は省略する。】

*

さて、次は国家が抱える「外患」だ。

過去を振り返ってみると、鎌倉時代の元寇（げんこう＝蒙古襲来）、幕末のペリー来航、太平洋戦争敗北と領土喪失、北方四島問題などがあり、更に現在、拉致と核・ミサイルの隣国がある。海外伝染病の侵入（特にエイズ、T P P（環太平洋戦略的経済連携協定）交渉、ハッカー問題などが引き続き発生し、頭痛の種が満杯である。そして現在最も悩ましい問題は、**領土**に関する力による法秩序の破壊問題である。

中国は尖閣諸島を戦時中、日本が盗んだものであると諸々の機会で海外に宣伝している。更に、ベトナムやフィリピンとは、境界線上の島々の領有権で争っている。

更に「防空識別圏」とやらを勝手に線引きして、力による支配権を主張している。日本の監視船に体当たりし、ベトナムの漁船に衝突して沈没させるなど、言語に絶する。相手国が我慢しているから戦争にはならないが、無謀極まりない。

また、もし、現在の中国の国家体制が崩壊し、無政府状態になったら、それはそれは世界中、蜂

の巣を突つついた状態になること必定。なにしろ世界の2割の人口なのだから。難民として世界に雪崩れ込んだら、世界中がパニックに陥る。

対策は、話し合いによる平和的解決策を探るほかない。世界各国は、経済進出など、中国本土で多くの企業が活動している。本気になって戦争するわけにはいかぬ。核兵器など終末的武器が氾濫する時代。談判が決裂しても、戦争するわけにはいかぬ。そこを見抜いて乱暴を押し通すのなら、世界は大きなリスクを覚悟で、強烈な制裁を加える他あるまい。

特許権侵害など腹にすえかねる。中国産の貧弱なリンゴに「青森りんご」と名づけ、青森のリンゴを「青森りんご」として販売する事ができない。「コシヒカリ」、「松坂牛」いづれも同じ。ミッキーマウスは、元々このようなネズミは中国にいたのだという。そして、世界中から新幹線技術を輸入し、新幹線を走らせたなら、これは中国独自の開発によるものとして特許をとり、世界に売り込むうとしている。

そして、日本の大手メーカーから開発技術者を引き抜き、次から次と模倣製品を製造販売。日本のメーカーも、開発技術者を十分に厚遇しなければ、こんな憂き目にあう事を強く心にとめ、以後、人事管理をしっかりと取り扱うべきである。

4000年を誇る中国の歴史。それは尊敬に値するものだ。しかし今、古の先哲の教えはどうなったのか。世界に誇る孔孟の教えはどうなっているのか。道義を排し、力による制圧は、いずれ虐げられた国民の蜂起で、必ず反撃を食らう時が来るだろう。真摯な反省がなければ、進歩はない事を肝に銘じるべきである。

北朝鮮による拉致問題は、この会報が届くころ、一縷の光明がさしていればよいのだが、約束の「特別調査委員会」は、いまだ立ちあがっていない（6・8現在）。他国の市民を拉致し、それを制裁解除の取引に使う狡猾さ。何をか言わんやである。内部に抱えた憂い。外部からの患いの元。個人も国家もあまりにも、難問が多すぎる。文明世界との交流を閉ざし、今なお密林で原始の生活に明け暮れるニューギニアやアマゾンの狩猟採集民族の方がずっと幸せそうに見える

「男子敷居を跨げば7人の敵あり」雨垂れは三途の川」ともいう。個人も国家も四面楚歌。とかくこの世は、住みにくうござんす。

ダイダラボッチの里

木村 進

毎年夏の旧盆の頃に、石岡市井関にある4つの地区で各地区の入口に藁でできた大人形（人間より少し大きい）を飾る風習が残っている。

この大人形は胴体や頭、足、手などの骨格は藁でしっかりと作られており、最後に頭から足の先まで毛むくじやらな体毛として杉の小枝を体中につけ、乳部と男性シンボル部にナスを使い、顔は紙またはブリキ板等に少し怖い大きな目鼻口を書いたものを取りつけ、腰には竹でできた刀を差し、手には槍を持った武士の格好をしてその地区に入ってくる者をにらみつけるようにして置かれている。

多少グロテスクだがテレビで子供たちに人気の縫いぐるみのムックに怖い顔の面をつけて門番の

ように刀を差して槍を持たせたと考えればよい。

地元では大人形というようだが、通称ダイダラボッチとも呼ばれる。

ダイダラボッチといえど日本各地に伝わる富士山や筑波山を持ち上げたり湖や山を造ったりする巨大な大男のことを一般には言う。

茨城でも常陸国風土記にも書かれており水戸近郊の大串貝塚の巨人の話が有名である。この大串貝塚ではこの話を元に遠くからでも見る事が出来るほど大きなダイダラボッチ像を作り、周りを公園として整備し、さらに日本各地のダイダラボッチ伝説を地図にあらわしたものなどが置かれている。

さて、最初に書いた井関地区の大人形は現在では代田・梶和崎・古酒（ふるさき）・長者峰の4か所の地区で別々に行われている。しかし最初は八木・御前山の2地区を含め6か所で行われていたという。

この大人形作りが始まったのは記録によれば江戸四代飢饉の一つである「天明の大飢饉」（1782～1788）の時だと伝わっている。この天明の飢饉は記録に残る飢饉の中で史上最悪の大飢饉と言われており、世界的にも変則的なエルニーニョが発生し、アイスランドの火山が爆発しその噴煙が成層圏まで達して北半球を噴煙で覆い尽くしたとも言われている。

日本でも浅間山が噴火（1783年）し、東北などの北日本では冷夏で作物が取れずたくさんの餓死者がでるとともに、疫病がはやり、道端にもたくさんの餓死者や病人があふれ、人肉食、べたなどともいう記録まで残されている。また記録によればこの飢饉で日本の人口は100万人近くも減少し

た。

こういう時代背景の中、この地区では各部落の入り口にこの大人形を飾り、自分たちの部落に疫病などの穢れが舞い込まないように願ったのです。今では毎年真夏の暑い8月16日に藁人形を作り、これを町の辻に持って行き飾りつけを行う。1年前に作って飾っていた人形は新しいに交換され、1年間のお役目を果たし、みすばらしい姿に変わっているが、これを燃やして厄払いをするのです。私も、ここ数年は毎年この日の夕方にここを訪れています。ちょうど暑さが厳しい時であり、夏の日差しが注ぐ日中は、皆で集会所などに集まり藁で人形作りを行い、夕日が傾く頃になって道端に出して体中に杉の葉をつけたり、傘をかぶせたりして飾りつけをします。

時間もそれぞれの地区で多少異なり、特に梶和崎地区は数週間早くすこし早く飾っているようです。

この大人形作りに参加できるのは地元の男子だけで、女性は大人形づくりには参加できないと言ひ伝えられてきました。最近では地元の小学生も人形作りに参加しているとも聞きました。

これらの部落は、それぞれ小さな部落であり、作業する人たちの年齢も上がり、サラリーマンも増え、また都会に出て行ってしまっていてなかなか集まってくる作業も困難になってきたようです。

このように働き手の若い人口が減少する中で一時、この大人形づくりを止めた時期がありました。しかしこの中止した時期に部落の中の働き手が数人亡くなったりして、これは大人形のたたりではないかと口にする者が出てきました。そのため復活を望む意見も出て相談の結果、4か所ではまた

飾るようになったという。

4か所の中で代田地区（ダイダ）という名前もダイダラボッチとよばれる一因とも考えられるはメイン通り沿いで、比較的わかりやすい場所だが、他の3か所は事前に場所を調べていかないと地元の人以外には比較的判断辛い場所である。行くのであれば事前に調べたりしてから訪ねてほしい。一度見ておかれたら面白いと思う。

さてこの人形はあまり他では見られない不思議なものです、少し似たものがないかを調べてみた。すると「鹿島さま」と呼ばれる大きな藁人形を道路端や道の角に飾る風習が残されている地域が数カ所あった。

これは千葉県君津と新潟県の一部、それに秋田県の南部です。これらは藁人形ですので石岡の大人形とは見た目は違いますが、体に付けた杉の葉をやめ、顔にもマスクをつけずに藁人形に直接描けばほぼ同一です。これが「鹿島さま」と何故呼ばれているのかは諸説あつてはつきりしません。

秋田では江戸時代は佐竹氏が治めており、佐竹氏が常陸から秋田に国替えになったことが関係しているのではないかとはいわれています。

また秋田も後三年駅などという駅名まである通り北へ逃げていった蝦夷の人々が追いつめられて戦った地区です。これらのことから「鹿島さま」とは鹿島神宮の最強の武人であるタケミカヅチをイメージして作られ、その鹿島の神様に部落を守ってもらいたいと願ったものかもしれない。

もう一つ面白い風習が行われていた地区があります。それは秋田から佐竹氏に入れ替わって常陸国にやってきた「秋田氏」が住んだ場所、茨城県の穴戸（現笠間市）です。

宍戸にある笠間民俗資料館に昔行われていたというこの変わった祭りの写真が展示されていた。この写真は田植えの写真で、田の中央付近に土でできた天狗の面が置かれ、この面に見守られながら田植えをする写真である。

資料館の写真の説明文には「中市原・鹿島神社の奇祭り・享保4年（1719）頃、中市原全域に疫病が流行した。村人は神官から田植の時に神田の中央に天狗の顔を祀るようにすれば疫病神が退治できると云うことであつた」と説明文が書かれている。

今でも田植えの時には、全国各地で豊作を願っているいろいろな祭りが行われている。この祭りの中には天狗の面をかぶった人々が登場するものもあるが、田に直接天狗の土面を作って田植えを行う風習もかなりユニークである。しかし残念ながら、この風習も現在では行われていない。

宍戸地区のこの周辺は古代の色合いが濃い地域であり、またこれが鹿島神社の關係する奇祭というので秋田や千葉の「鹿島さま」大人形とのつながりも考えられる。

秋田氏は蝦夷（アテルイたち）の末裔である安倍貞任の後裔を称した安東氏の後身であるともいわれ、いてどこかで関連する事があるのかもしれない。石岡の大人形にしろ、この鹿島さまと呼ばれる大人形にしろ、農民・庶民とのつながりが強い風習であり、庶民の思い・願いなどの感情を考える上でこのような風習が無くならないでほしいと願うばかりである。

各地の禅寺や密教色の強い寺の入り口に「結果石」と呼ばれる石が置かれている場合がある。これらも外界との境に境界を設け、ここから先は煩

わしいものが入ってこないようにした一種の魔除けであるが、こちらは宗教色が強い。

一方、石岡のダイダラボッチ（地元では大人形と読んでいる）は流行病の侵入を防ぐ厄除けの意味合いが強いと言うが、これも芸能の一つと考えてみることもできるだろう。

もう一つこの石岡の井関地区を考える上で、忘れてはいけないことは、この地域は江戸時代には水戸藩の飛び地であつたことである。霞ヶ浦の高浜入りの入り口にあたり対岸の田余（玉里）地区との間の霞ヶ浦領域は川でもないのに御留川（川の両側に領地を持つていればその間にある川の領有権を認めるという制度と認定され小川から玉里、そして井関という地区を水戸藩が治めていた。これは、江戸と水戸との間の物資輸送などでも重要な地域であり、水戸藩にとっても重要な場所であつたが、文化も含め独特の流れがあつたようだ。小川には水戸の医学校もでき井関にもそこで学んだ人物などが活躍していた。江戸末期から明治初期にも各種の塾が花開き多くの人物を輩出している。これらの事柄とこの大人形を飾る風習も決して無縁ではないであらう。やはり砂鉄採取などの跡（ダイダラボッチの足跡などもあるというのだから、このダイダラボッチの里も掘り起こせば何かが見つかるかもしれないという楽しみな地域である。

共生

伊東弓子

「人に合わないね」と、よく聞く。私も人の姿を見ることが少なくなつたと思う反面、能くもこんなに人がいるものだという所や、催しがある。

世界規模の問題が自分達の住む地域に影響を与えているのは分かるが、直接的には車生活で速さが増し、情報の多さに迷い、物品、金銭への欲望が後を絶たず、格差も酷いそんな中で埋もれそうになる一人一人だ。人に合いたくない。人の世話になりたくない。人に迷惑かけたくない。私の生活を覗いたり干渉してほしくないということになるのかな。

人はひとりでは生きていられないんだ。人は助け合い、支え合つて生きているんだ。だから迷惑をおかけするかもしれませんが、お世話にもなるでしょう。そういう気持ちが土台になれば地域での生活や催し、活性化も良い方向へは向かないと思うこの頃だ。そういう私は社会や自然、人間とどんな係わり方をしているだろう。

私の一日の始まりは大型トラックとの語らいだ。『出かけるよ』『まだ起こさないで』『と何台かに不満を言う。新聞配達達の兄さんも牛乳配達達の伯父さんもこの頃は十分ゆつくりになった。明け六つの鐘を気持ちよく『ごくろうさん』と聞いていると、六時のチャイムが邪魔をする。その頃お腹の中で『グルグルルルウ。グルルル』と排泄の合図が送られてくる。『今日も元気でいこう』と答えてやる。いよいよ一日の始まり。隣の兄弟が保育園に母親と楽しそうに行く。孫達が学校へ向かう出かけに『一つ持つて』と仕事を頼む、犬の散歩に行く人とも畑に行く人とも必ず会話が出来る。娘の旦那にはゆつくり話しかける。朝夕の挨拶以外に天気、畑の様子、その日の出来事を分かりやすくゆつくりと交わす。『早く、数多く覚えてね』と願いを込めて見送る。

『今日はどんな事があると思う。どんな人に合

うかね」と話しかけても言葉が返ってこない貴方、表情もないし温もりもない。怒りもしない。『静いがあつても生きている人間同士の時がよかったね。』さん』日々の出来事や思いを話しかけて満足している私がある。

歩くという運動は全くしていないが、用を足しながら自転車で走る。そんな中では出会いが幾つもある。昼間車の動きはあつても人の姿はない。どこに人はいるのだろう。季節によって田に、畑に、果実畑に働く人がちらほらという程度だ。

蓮田で朝早くから働いているのは中国の人。元気に挨拶してくれる。幼い子は母親や祖母と散歩という形で月に一、二度合う程度だ。小中学生には朝夕の登下校時でないと合えない。地域にある雑貨店では、店の人と買物にきた同志で話しが弾む。ストアーに休憩場がある。昼時、買物した弁当やパンを食べながら話している人が多い。家で一人食べるよりどんなにか美味しいだろう。車と自転車の会話もある。老人が走ってくるよという気持でいると、傍をスピードも緩めず通り過ぎて行く。『弱い者虐めしないですよ』と恨めしい気持と不安の声を車に負わせてやった。雨の日の車との言い合い、夜の車との遣り取りは凄まじいものがある。『静かに走つてよ。水が私に真面に掛かっちゃうでしょう』『ライトを下にしてよ。眩しくて危ないよ』と手で表現しながら訴えると反応してくれる場合もある。車もこんな嬉しい声かけもある。『ぶっぶう』反射的に見て『あーらおはよう』と声を出していた。あの友達だと分かって鼻歌も出てくる爽快な気分だった。八十年代前半の知り合い同志が友を見廻っている。そんな仲間がいるのもいい。そういえば私の友も月に一度は

必ず電話をくれる。『・・ちゃん元気が、用はないけど元気でいればいいよ』と言いながら長々と話しが続く。これも有り難いことだ。堤防を走る風が心地よい。この川に生命を落とした人の声が聞えるようだ。動かず釣り糸をたらす人に申し訳ないが声かけたくなる。『釣れますか』『おう釣れたよ』『だめだ』と返事が返ってくる。そこで終わればいいのに一言多い『塵置いてかないでね』『分かったよ』と返ってくる。

「おら(私)テレビと話してんだよ」と友がいう。腹を立てたり大声で笑ったり反論してみたり、涙も出るよ。でも黙って見ろというように言われたのに反発したいが、上手くいくように考えていくとのことだった。久しぶりに尋ねた人は五ッ位年上の人だが、近所隣りが怖くて外に出ないという。体の恰好が悪くなったとか、家柄がどうこうとか、学がないと露骨に言われるそう。地獄に近い毎日だから時々来てよと縋るように話してくる。

文化センターコスモスが出来て二十周年の祝いをするので実行委員を立ち上げて動き出したと聞いた。一寸一言各グループに呼びかけてみた。が反応なしのグループ、聞く耳もたずの会、余計な仕事が出来るといやがる会、難しく考えないというグループ、上の方から言ってくるでしようという会。一緒に考え合って作り上げたかったが、皆自分のグループのことで精一杯の様子だ。安い場所代で好きな方向をめざしてやれることには人の集まりが出来るとだに再確認した日だ。

心身共に疲れた時は、自然との語らいが最高の治療薬だ。鳥が『どうした。不幸でもあったか』『ううん』答えるといってしまった。時鳥がやたら鳴く。何を言っているのか心の慰めになる。山

ギター文化館

2014 CONCERT SERIES

- | | | | |
|-----|-----|----------------------|----------------|
| 9月 | 7日 | 福田進一 | ギターリサイタル |
| 10月 | 5日 | 村治奏一 | ギターリサイタル |
| 10月 | 18日 | 長谷川きよし | コンサート |
| 11月 | 2日 | 樋浦靖晃 (G) & 芝草幹夫 (FL) | コンサート |
| 11月 | 9日 | 里山と風の声 | コンサート 亀岡三典 (G) |

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

道を行けばどくだみの群、静さの中、あの白と緑には癒される。韓国ドラマの中にいる様で通り過ぎるのが惜しい。冬は殆ど虫類の姿を見ない。が、暖かき、暑さと移りいく中で数知れぬ程姿を現す。皆厭がるが何でだろう。あんな達とわたし達同じ祖先を持つのよね。とじつと見ていたりする。小枝かと思つて踏んで通ったがあれは縞蛇だった。『昼寝の邪魔してごめんね』で済んだ。自然の中で力を貰うと又欲が出て人間のところへ寄っていきなくなる。出来れば『お茶でも飲もうか』と誘ってくれる友がいまいかと考えたりする。

そんな時間を夢みたりするが、否グループ活動で「みんなでお茶のめるよ」と自分に言い聞かす。

一日目粉しく過ぎて一息吐く頃には、車の音も殆どない。亀が這い上がるうとして「ゴトゴト」と庭の方から耳を突く。私も亀の姿を真似て四つん這いの体操をしてみる。床に入ると「羊が一匹、羊が二匹」ならで、自分から歩き出せば人に合える、自分から尋ねれば話しが出来る。話しが出来れば心が通う。また明日も人に合える。なんの話しが弾むかな。と呟きながら眠りについた。

その日は催しが三つ重なっていた。優先順位は決めてはあったが、突如頼まれたことを優先した。以前のようにこちらを済ませてそっちへ、あっちとこっちの合間にそっちを済ませて…という変身振り、対処が出来なくなってきたこの頃の私だ。往生してという気持ちもあったが、私にとつて大切な留守役を選んだ。二日間落ち着いて庫裏、境内、本堂に訪れた方々とお話しが出来た。

どんなに立派な建物でも人がいなくてはだめです。訪れた人と話しが出来なくてはだめです。留守役を妹と共に確りと果たせました。

二日目、陽も傾いた頃、寺内を一回りしていた時、四十代の男の人に合った。

「苦労さまです。ご家族の「冥日です」と尋ねると、

「今日は父の日なので親父に合いに来ました」と然り気なく言う。

「嬉しいことですね」

感動した足で、私も二人の父の所へ、蓬と咲き残りの姫紫苑を摘んで供えた。あの世の人と、心交わせた素晴らしい日だった。

あの世とも、現在のこの世の人達とも、先に連

がる子達とも、心を交わせ共に生きていきたいものだ。

宮下町の獅子衆

兼平智恵子

指折り数えて、今年も恒例の石岡のおまつりまであと二ヶ月余りとなりました。

平成二十四年十一月より石岡のおまつりで華やかさを誇る山車の上に乗る人形についてのエピソードと共にその町内のご紹介をしてきました。

人形を保持する十二町内は年番町（二年交代による年番町はおまつり終了時から次の年番町に引き継ぐまでの一年間、神社への奉仕に努めおまつりには御仮殿が設けられます、当初の年番町は十六町。のちに一町内が辞退し現在は十五町内）内にあり、更に四町内の皆さんにもご自慢の出し物について大いにお話し頂きました。今回は宮下町の獅子衆で十六町内最後のご紹介となります。

「石岡の地名」によりますと石岡の地番振出しは常陸國總社宮となっております。大正四年總社宮は一番地となりました。總社宮所在の町名は宮町とか宮本町であるべきと思われるが石岡は宮下町となりました。

宮下町は一番地の總社宮を中心として東南から西北にかけての低地域一帯で、現在地は總社二丁目となっております。

国道三五五線（旧水戸街道）中町交差点より志筑方面に向かう通称宮下道りを中心に両方に広がる町並で約百世帯の町内となっております。この宮下通りは石岡大火の年、昭和四年十一月、陸軍特別大演習のおり、昭和天皇が行幸なされた時の御道筋

でもあります。

今回はお綾麗工房おかだ様よりご紹介頂きました林様をお尋ねしました。ご夫妻揃ってご丁寧に世間話も加わって楽しくお話しをお聞きする事ができました。驚きました事に町内には湧き水の出るところが多く、少し前までは飲み水にしていた家があったそうで、林さんの所でも屋敷内に富士権現山（今は崩れてしまっていないそうです）があり、そこから湧き水が出ていたそうです。かえって庭などに井戸をほると鉄分が多く飲料水にならなかったそうです。

總社宮境内、西側相撲場近く御手洗の看板のところを、下りて行くと（昨年の暮れ何十年か振りの禊ぎが行われました）清水の湧出すところがあり、「總社宮のみたらし」といわれ、その一帯の地域を御手洗との地名があり、その地区の家、家では神事や巡業でいらしたお相撲さんにお風呂の提供をなさった時代があったとのこと、清水での、おもてなしたたのでしょう。この御手洗地区は後に宮下町に併合されたそうです。

明神さまと信仰されていた總社が鎮座する宮下町は年番制度が行われる以前には世話方として現在年番町内が行っている大役を担っていたそうです。

總社宮の参道はもともと宮下通り側にあり、現在の宮下児童公園の脇に古い鳥居が有ります。

「天保十年九月〇〇造立」願主 氏子中 世話方「宮下町」の文字が刻まれていて、一七〇年前に宮下町で寄進したことがわかります。鳥居の高さは四・六mで大きいものですが現在の参道にある大鳥居は八・七mあり市内で一番大きいそうです。

最後になりました宮下町の獅子は現在七台揃っ

ているとの事でした。年番制度になって最初の年番、明治四十三年に子獅子が登場し、次年度の年番、大正十五年には大きい既成の獅子を購入し、しかし間もなく壊れてしまいその当時の米粒で修理されたまま大切に保管され、おまつりには会所に鎮座。三台目は東京から購入これもこれ修理。この頃の獅子舞いは闘いになっていたという。四台目は小川町からの寄贈、大きく重い。五番目は市内獅子頭の彫り師藤枝様のお弟子さん寄贈。六番目は町内の方の寄贈。七番目は町外の人の寄贈。と一同に並ぶと勇壮圧巻。こうして沢山の獅子達は壊れて修理されている以外は交代で巡行で活躍しているそうです。

獅子達が交代で祭礼に参加していることは宮下町ならではの、豊富な獅子達に声援を送ります。林ご夫妻様ご丁寧に詳しく楽しく誠に有難うございました。

・どっさりの緑の中 行く人 智恵子

【風の談話室】

梅雨の雨とは思えないグリラ豪雨が各地を襲っている。偏西風の蛇行によって気象が大きく変動しているのだそうだ。

異常気象といえは異常気象なのだろうが、自然環境は時の移ろいのよつに一定の規則性を持つている訳ではないのだから、人間の勝手な言い分のような気もしないではない。

規則性を無視した予期せぬ動きのあるのが自然な

のだと考えれば、偏西風の蛇行による気象変動も異常とは言えないだろう。

とはいえ全くの規則性を持たない環境の中では生きのびて行くことは容易ではない。安心に生命を維持したいとの思いの中では、不規則性こそが自然なのだと言観した考えに暮らす事は難しいだろう。

今月は、久しぶりに嬉しい投稿を頂いた。間もなく100号を迎える当会報であるが、嬉しい投稿を毎月頂ける会報になってくれることを願うばかりである。

《読者投稿》

総社宮祭礼と市民の矜持

太田尚一

かつて那珂湊の天満宮の祭りについての記事を扱ったことがある。大層厳しい伝承を今もって継承し、海とともに生きる街の人々の矜持が感じられた。

この天満宮の祭りにも獅子(ささら)・屋台が弾き回され、その見どころは獅子の囃子をリードする先笛の存在である。この先笛を奏することが許されるのは心正しく、一途に笛に精進し人々から尊敬される立場にある人に限られ、大相撲の横綱を張る様な、その道の頂点に立つ人が選ばれる。

また、天満宮の祭礼には、「さがりは」という雅びな曲を奏する楽人の存在があったが、現在ではこの曲は奏されてはいない。

その後市が獅子の囃子を新たに「下がり羽」と称して、市の無形文化財に指定したが「那珂湊獅子囃子保存会」の面々により、市の史料解釈に飛

躍があったとして「下がり羽」と「獅子の囃子」は個別のものと論証されたのである。

(菊池恒雄「那珂湊ささら旧聞控」／「市文化財『下がり羽』について」『常総の歴史』6・7／27)

☆

翻って当地、石岡の総社宮の祭りはどうだろうか、検証してみたい。小生の本音は、祭の主旨、歴史を正しく認識し、石岡人のプライドを以て正しい喧伝をしようということにつきる。

この祭礼に対する役所・総社宮の認識の甘さが際立っている現在、ただ傍観していることは市民の一人として容認致しかねない。自分なりに、問い合わせ、申し入れを何度も繰り返し、かつて役所が市の広報誌で記述していた。祭の濫觴についての記事、「紀元八世紀頃、武士の祈りから」とか「元禄時代武士の祭りが民間に移行した」とかの記述はようやく取り下げられたが、未だ、時の観光協会会長・副会長によつて創り出され、対外的に問題のある「関東三大祭り」のフレーズが横行し、平成二十年からは、祭りの濫觴のかわりに出てきた、天下泰平、国家安穩、萬民豊樂、五穀豊穰との、どこの祭りでも飾られる用語である、これらのどこがどう好ましくないのか、石岡の市民は、全く無関心である。

祭りの濫觴・喧伝文句、皆々全く根拠のない根無し草であることだ、なり振り構わずの根無し草は必ず枯れる。

八世紀の武士の祈り、等と言え、専門家はもろろん識者からも一笑に附されることは明らかだ。武士と名乗る、或いは武士と呼ばれる人々の登場は、平安中期から後期の十一世紀以降とされる。さらに総社の用語の文献上の初出は、承徳三(10

99)年、因幡国の国主に任じられた平時範の日記の同年二月条とされている。

櫻井明氏の「祭礼の伝承」(『常府石岡の歴史』(石岡市教育委員会発行) 所収)によれば、

長元五(1032)年『更級日記』の作者の父菅

原考標が常陸介に任じられた時の『更級日記』に記された消息から、考標が神拝を行ったことが記されて居り、この時点で総社の創建は未だ成らずであつたことが知られるが、「総社文書」の「治承三(1179)年総社造営注文」は前半部を欠いてはいるが総社に関する最古のもので、これが総社創建時のものか、その後の大規模修造當時のものか明らかではないが、やはり常陸国総社も一般総社の通説通り十一世紀から十二世紀の成立と考えることが出来るよう。

にもかかわらず総社の祭りの濫觴を八世紀に求めてしまうのは、一種、いわゆる系図屋の作成する当家の先祖は源平藤橘に発するという様な作為である。次に記述された、武士の祭りが元禄期には町民が参加する庶民の祭りとなった、という、これらの根拠や文献を問うと、平成二十年からこの記述は取り下げられた。

しかし未だ役所により活字化され、最強の喧伝用語となっている「関東三大祭り」のフレーズは最大の根無し草株であることは認めざるを得ない。櫻井明氏が「祭礼の伝承―常陸総社祭礼―」の関東三大祭りの項で、

「関東三大祭り」という文言とその相手に武蔵総社・大國魂神社の「府中暗闇祭」と利根川・北浦・霞ヶ浦水運の要衝である佐原の「佐原囃子」をあてたことは、歴史的背景を見事に表現した極めて秀逸な創作であつた。

と記述されている。(傍線は筆者)

何んと歴史研究者としての教養溢れる最大の皮肉であろうか。一見、批判するにも相手を思いやり、その豊潤なる発想を評価しているのだが、作為である、と断じて居られる。

「井の中の蛙大海を知らず」という慣用句がある。一つの井戸、一区画の田圃の中なら通用する「関東三大祭り」、大海ではどう評価されることになるのか。根っ子のところを問われると答えが出来ない、それでも「観光用語として外せない」と居直られた、石岡人の矜持をかなぐり捨てた態度、見識と解釈される。こうした一にぎりの人達によつてリードされる当地はきわめて不幸であり、これから石岡を背負う若き人々への影響は計り知れない。

☆

江戸時代に記録のある、天王社の祇園祭や愛宕神社の祭礼の行事は、いわゆる「お浜下し」という神が水辺で禊をして、その神威をあらたかに復するというものである。

ここで、総社宮の大祭はどのような祭りか考えて見たい。総社宮の祭礼は、江戸時代から明治二十年頃までは、記録に残るのは神事として奉納相撲が行われただけである。

明治二十年八月に、総社宮催事に初めて香丸・中町・守木・富田の四組の年番制を導入、奉納相撲の執行を取り決めた「常陸国総社宮例祭議定」の記録が、近代の祭礼に関する最も古い記録である。これによりこの時点で総社宮の祭礼は、奉納相撲のみであつたことが知られる。恐らくこの年番制をもとに、徐々に現在の様な祭礼行事が発想されて、明治三十年九月になつて青木町の宮大

工・小井戸彦五郎(万延元年一月〜昭和十四年十月)によつて神輿が奉納されて、神輿が御飯屋へ出御する祭礼行列が創出されることになる。

江戸時代の祇園・愛宕祭礼の出し物を引き継ぐ富田のささら・木之地のみろく・土橋の獅子等、そして明治三十二年になつて、中町の日本武尊をいただく江戸型重層山車が登場、総社宮の祭りの一層の華やかさを演出することになった。

これより少し前、明治二十九年、仲之内町の福徳稲荷神社の祭礼に奉納された獅子頭が、製作年号が明らかでないものであるが、土橋の獅子は、すでに嘉永七年の香丸組の御用留に、「土橋・大獅子(当年より定例)」との記述があり、獅子頭で最古のものと考えられる。

伝承では、宝暦(一七五二〜六四)の頃、土橋町で世話になつていた渡大工が、御礼として製作置いていったものと伝えられている。

明治三十年前後に創出された総社宮の祭礼行事は次第に各町内が参加することとなり、明治三十五年になつて新たな祭礼執行の年番制が議決されることになり、現在の祭礼行事の原型が形造られることとなった、と考えられる。総社宮の例大祭は比較的新しい祭礼行事なのである。

そしてその祭礼行事の様相を一瞥すると、行列を先導するのが、日本神話で皇祖・天照大神の孫瓊瓊杵尊降臨の際に道案内をし、のち伊勢の五十鈴川上に鎮座したと伝える神、猿田彦であり、続いて神旗が、特に天皇の錦の御旗が奉持され、天皇家の菊の御紋を付けた神輿が続く、まさに「近代天皇制国家によつてオーソライズ(公認)された行列であつたことがうかがえる」。時代的にも、王政復古後、日清・日露の戦役で天皇のご威光が頂

点を極める時期に当り、国民の皇室への敬畏が最も昂揚した時期でもある。

かつて、不慮の火災で拝殿を消失した総社宮拝殿の復興竣工記念祭が昭和六十年九月に行われ、小冊子の記念誌の中で石崎紀夫宮司は次の様に記している。

神威四表に輝き神沢（神託）万民に洽しの幟旗の如く皇室の弥栄、国家の安穩、社運の隆盛、氏子の崇敬者各位のご多幸を念じ……。

と、第一義に皇室の弥栄が念じられている。

また「祭礼の伝承」で櫻井明氏は次の様に記されている。

「今日常陸総社宮例祭として行われている石岡のまつりが、江戸時代においては天王社の祇園まつりであったことは、興味を引く事実である」という『石岡市史』『石岡市史 下巻』の記述に対しての、「形態から考察して総社の例大祭は、江戸時代において祇園祭だとするのか、とすれば些か抵抗がないわけではない、祇園祭は祇園祭であって総社宮の祭りではない」（大山隆光「祭礼雑考」『常陸総社宮例大祭と獅子』所収）という批判は正鵠を得ているといわなければならない。

総社宮の例大祭が武士や武家に始まる祭りではないこと、明治の中盤になってからの新しく創出された祭りであること等、先学に導かれて得た私りの結論である。

平成二十年から記述されている天下泰平、国家安穩、萬民豊樂、五穀豊穰等役所の独断と偏見ではあるが、今後こうした祈りを奉じて祭行しようというのであれば、総社宮、氏子会、各町内の祭典代表等との合議の上承認を得る必要がある。

そして、根無し草の喧伝文句は撤回し、真に誇り得るもの、江戸時代からの大獅子の存在とか、江戸の天下祭に参加した百余台の山車で、「將軍家の上覧に供した現物そのもので」日本橋の町内から金丸町が大正十一年に購入したため、翌大正十二年の関東大震災での被災を免れた唯一の弁財天をいただく江戸型重層山車の存在等。石岡人の矜持を担保することが重要である。

（二〇一四年六月）

古今東西、歴史は「勝者の理論」によって都合のいいように創られ改竄されると言われる。

石岡に越して来た当時、石岡の祭りは関東三大祭りだと聞かされ、へんな宣伝「ピー」をつけているのかと思つたのであった。ところが、歴史ボラティアガイドの研修会に参加した時に「三大祭りとは武蔵総社・大國魂神社の「府中暗闇祭」と利根川・北浦・霞ヶ浦水運の要衝である佐原の「佐原雛子」をさし、昔からそう言われていると聞かされた。小生、東京都狛江市に二十年住んでおり、子供達を連れて何度か府中の暗闇祭りに出かけたが、そんな話は聞いたこともなかった。

こうした誇大広告の様な自称話は、普通相手のことを言わないものであるが、歴史的事実としての話にはビックリ仰天したものだ。

世界、日本三大〇〇という話は、自慢話の頭にはよく付けられるものであるが、歴史的事実の中に組み入れるべきものではない。

歴史という言葉は、元々は暦をつくる記録・統計から始まったもので、事実から逸れてはいけないものである。暦が時々の権力者の手で変えられたら暦で無くなってしまう。太田さんの、投稿には編者と

しては大きな拍手を送りたい。

関東三大祭りの「コピー文は、コピー文として構わないが、そこには是非「江戸型重層山車の存在」を大きく取り扱って貰いたいものである。

養生日記『幸せを風に乘せて』 堀江実穂

私は、離婚してから暫く実家に戻っていたが、早く自立できるようにと、心の医療センターの近くにアパートを借り、一人暮らしを始めた。もう一年半になる。

私は、女子高、女子短大を卒業し、保育士の仕事についての事から、男性に対する免疫力が少し弱いものである。それなのに恋に恋するところが強いものだから、すぐ男性に付け込まれて往生させられてしまう。結婚もそうだったのだろうな、と今はようやく過去のこととして振り返ることが出来る様になり、一人暮らしもスムーズに出来る様になってきた。

現在私は、月曜日から金曜日まで心の医療センターのデイケアに通っており、土曜日はデイケアのメンバーの人と病院の庭でランドゴルフを楽しんでいる。日曜日はクリスチャンの集会に行った後実家に帰るという生活を送っている。

デイケアでは、社会復帰へ向けての色々なプログラムが用意されている。その一つに、火曜日デイケアのメンバーが営業する「100円喫茶やすらぎ」がある。100円で好きな飲み物と好きなお菓子を一つ食べられる。毎回喫茶やすらぎには200人以上のお客様がいらして下さる。病棟の患者さんや外来で来ている方が殆んどである

が、一般の方もいらつしやる。皆さん毎週火曜日を楽しみにして下さっている。

私は、アテンンドの副部長をしています。お客様からは、飲物もお菓子も美味しいと仰って頂いているし、接客態度なども良いとの好評をいただいている。アテンンドの副部長の立場からすると、お客様さまからのお褒めの言葉を戴くことは大変うれしいことであり、メンバー全員にとって前向きに生きるエネルギーにもなる。

喫茶安らぎは、ディケアーのプログラムの一環なので、お給料などはもらえないのであるが、皆真剣に自分の仕事の役割をこなしています。機会がありましたら一度是非お立ち寄りくださり、前向きに進もうとしている障害者の姿を見て頂きたいと思います。

私自身、こうしたディケアーのプログラムの下に、自然体自主的生活のできることを思い描きながら、幸せの風に身を乗せられることを願っています。

私達は、自分の無関心、無関係なことに対して直ぐに勝手な断言を発してしまうものですが、堀江さんの養生日記を読ませてもらうと、「側溝にしがみついて咲く小花、名は何と尋ねるも応えのみえず」と詠んだ自分がいた事を改めて思い起こされます。

《ことば座だよ》

6月定期公演が終わり

小林幸枝

6月14、15日に行われたことば座第27回定期

公演が無事終わり、大勢の方達から応援の言葉を戴いた。今回の公演では、札幌の表現集団「つむぎびと」の方達と5月に札幌で共演させて頂いた「かがり舟」を、再演することが出来ました。

札幌から、朗読の熊谷敬子さんとギターの亀岡三典さんが来てくださり、東京からフルート奏者の池田さく子さんが応援で来て下さいました。

今回、私の応援者（囀の仲間）は、ギター文化館へは初めてという方が多く、朗読で手話舞を舞うことに大変驚いていました。

万葉集と古今集は、朗読の文は難しいけれど、手話舞を見るととても分かりやすく、歌の意味が良く分かったと好評を頂きました。

かがり舟、万葉集・古今集を舞った衣装は熊谷さんが着物からリメイクしたドレスを着て舞いましたが、着物がこんなに素敵に舞いのドレスになるのを見て皆びっくりしていました。また、万葉集でのドレスは、以前にことば座の応援者のお母様の着物を頂いた物を舞いドレスに熊谷さんが作ってくださいました。大勢の方からとっても素晴らしい衣装だと褒めて頂き、私も大きな自慢になりました。

今年度は、ことば座の公演は6月だけですが、9月にはふるさと風の会報が10号を迎え、記念展が行われますので、もしかしたら万葉集などの舞を披露する事になるかも知れません。

常世の国の恋物語百も、まだ³⁴話が終わった所ですので、百話達成に向けて頑張っていきたいと思っております。ことば座と朗読手話舞、宜しく応援お願いいたします。

いま朗読が元気

白井啓治

第27回定期公演が終った。小林の手話舞も本人の自信と欲が現われてきて、安心して見ていられるようになってきた。今後どのように手話舞の完成に持って行こうか、暫く充電期間を取って考えようと思っている。

昨年、十一月の東京公演以来、音楽家たちとの交流が増え、色々情報交換が進んでいるのであるが、多くの人達が朗読とのコラボレーションを楽しんでいる様である。確かに朗読とのコラボレーションは、大きなステージが必要ではないし、ちよつとしたスペースがあれば何時でもできる。

ギターと朗読、フルートと朗読、ピアノと朗読、クラリネットと朗読、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、オーボエ、各種のパカッション・等々、一つの楽器と朗読での表現活動が活発に行われている様である。

形にとらわれず自由で自在な表現活動が広がって来る事は大変うれしいことである。ことば座の創設は小林幸枝という囀者の表現と出会うことで朗読を主旋律に手話を舞にするというニュースタイルでスタートしたのであるが、既成に囚われず、自由な形で自分表現の舞台を創ることは、大掛かりな舞台を創るのは別の楽しさがある。こうした形で身近な演劇活動が数多く展開されることを大変うれしくみている。

先日、三波春夫の歌謡浪曲を何年ぶりにUチューブに見て、そうかこんな形の朗読の表現があつても悪くはないと思つたものだ。実際のところ物語を表現するのに決まりはないのである。自分の好きな物語（小説&詩歌）を借りて自在な表現

を創り上げていく。素晴らしいことである。
いま朗読が元気になっていることを知って、大層嬉しく思っていると同時に、色々な形での演劇としての朗読を創ってみたいなど思っている。

《一寸一言・もう一言》

一寸一言

教祖誕生

打田昇三

西暦五七〇年頃という日本に仏教が伝わり始めた時代であるが、其の頃にアラビア半島の中心都市メッカで生まれた不幸な男の子がいた。父を知らず、母を六歳で失い数年後には育ててくれた祖父も他界して叔父に引き取られたと言う。成人して貿易会社に就職し、そこで働きぶりを社長に認められた。社長は大金持ちの未亡人で、歳の差はあったと思うが働き者の青年を夫に迎えた。かつて不幸だった少年は交易商人として活躍し、充実した日々を送っていた。

メッカは裸山の谷間に発達した町でユダヤ教やキリスト教などの信者も多かったようである。古代からアラビアの人たちが信仰していた多くの神々も有力部族の庇護を受け、それぞれに崇拝されていた。恵まれた地位を得た交易商人も既成宗教を信じてはいたが何か物足りなかった。彼の心を悩ませていたのは貧富の差、部族抗争、奴隷制度などである。彼は長い瞑想に耽った。

西暦六一〇年頃、その男ムハンマドに「アッラー」と名乗る神の啓示が降り、彼は唯一神として絶対の帰依を説いた。最初の信者は妻のハデー

ジャである。ハデージャの死後、ムハンマドは親友アブー・バクルの愛娘・アイーシャを娶った。この女性は才女で教団の発展に寄与した。イスラムは単なる宗教では無い。信徒は家族と見做されていた。現代は宗派も分れ国家間の対立も有って中東の紛争は絶えないが、教祖が神から受けた啓示は「抗争」では無かった。

輪廻

菅原茂美

歳のせい最近「輪廻(りんね)」という字に、どうも引かかる。「現世」という字があるのだから、「過去世」や「未来世」があってもおかしくないはず。また歌の文句にも、♪次の世もあなたと結ばれたい：などと言う。インド哲学の「輪廻思想」は、魂は死後、新しく別の生存形態に生まれ代わる：としている。そして何に生まれ変わるかは、その人の生前の「業」によって決定され「善因善果・悪因悪果」と説いている。やがて、こうした輪廻転生は「迷い」の状態とされ、煩惱の束縛から解放され、自由で理想的な境地の「解脱(げだつ)」が求められるようになった。

人間の「意志」は、所詮、神経細胞の中での「生化学反応」の結果と、これまで高をくくってきた。当然死ねば全ては「無」に帰する：と。しかし例えば植物のモミジの木は我が子が日のあたる所で丈夫に育つよう、種子にプロペラのような羽をつけ、遠くへ実を飛ばすように進化した事実などを見ると、もしかしたら植物にも、「意思」のようなものがあるのか：と思ったりする。

我々の精神世界は、50億年前に太陽、46億年

前に地球、40億年前に生命が誕生したが、この体系の中で育成されたもの。しかしこの広大な宇宙には地球文明などより何億年も先行する文明があるはず。そのような遙かに先輩の文明と輪廻により地球文明とが、魂の交流をしていたとしたら：。証拠がないからと一概に否定するのは愚かな事。高度に進んだ文明が例えば後発の地球生命に立ち入り、遺伝子操作等している過去が無かったとは言いい切れない気もする。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

Ⅱもう一言Ⅱ

戦場の烏帽子(えぼし)

打田昇三

伊豆で挙兵した源頼朝の一行は、初戦で平家一族の山木兼隆を討って石橋山に布陣したけれども程なく平家に味方する大庭、伊東などの軍勢に攻められて散り散りになり、頼朝ら何人かの者は山中に潜んでから船で房総半島へ逃げることにした。激戦の後で兜(かぶと)を無くした者も居る。頼朝は、

「兜が無いと、落ち武者であることが一目で分かって、土民たちに襲われるかも知れない」と心配をしていた。

烏帽子でも被れば良いのだが無い。

話としては出来過ぎているから怪しいけれども「源平盛衰記」によれば真鶴の港へ行く途中で頼朝らの一行は、甲州から来た大太郎と言う烏帽子商人に行き会った。

逃げる頼朝たちは現金を持っていない。強盗のように奪う訳にもゆかず、地元の土肥実平が知人の家に招き入れ、酒肴で接待してから人数分の烏帽子を提供させた。甲州は源氏系の武田氏領でもあるから商人は納得したのであろう。

烏帽子は折って被るので、六人の家臣は自然と右折りにしたのに、頼朝は左折りにした。源氏は烏帽子を左折りとしたらしい。

偶然ではあるが気位の高い頼朝は喜んで、この烏帽子売りは平家が滅びてから甲斐国に褒美として土地を与えられたと言う。

「宗派対立」

菅原茂美

どの宗教にも共通する事だが、原点は同じでも派閥により、細部の内容が異なる。それが争点となり争いが絶えない。なせもつと「寛容」の精神を持って、仲良くできないのか。博愛主義は名目だけなのか？

最近イラクでスンニ派(ス派・超保守派)とシーア派(シ派)が対立し、同じ国民同士で、政府軍(シ派)とアルカイダと結びついていると言われる対立派によると両派の違いは、まず人口は世界でイスラム教16億人のうち、ス派が9割。礼拝の回数、ス派は1日5回、シ派は3回。ス派は経典コーランの戒律を重視、個人崇拝はあまりない。対するシ派は個人崇拝が強く最高権威のイスラム法学者(世界で60人)を信徒の模範とする。世界的には、両派は平和に共存しているが、イラク・シリアでは、ス派がシ派を「背教者」として断罪している。

原理主義者というのは、いずれの宗教でも、過激傾向が強い。現在アメリカではキリスト教原理主義者が、バイブルに書いてあるもの以外は決して受け入れようとはしない。例えば人類が猿から進化したとする進化論は、異端な空論として、高校で進化論を授業した教師は襲撃されたりしている。進化論教育を禁じている州もある。私が駐在した中米のある国には、アメリカを脱出したキリスト教原理主義者(500人)の集落があり、学校・発電所・教会・農場などを独自に持ち、バリケードで集落を囲い、一切外部と遮断して、独立国の中に、更に独立国もどきが存在している。芸術作品などが産業。

己の質を問う

白井啓治

昨今のニュース情報を見ると、政治家の資質を問う内容のものが急激に増えてきているように思う。

マスメディアの報道を見ると、ワイドショーばりの下世話な騒ぎたてで注目が集まればそれで良い的な側面のあることも否定できないが、政治家の質の低下が気になる事も確かである。

政治家の質の低下を嘆き、政治家としての資質を問うことも必要であるが、それ以上に彼らに投票する選挙民としての質を先ず問うことが必要であろう。実際、恥ずかし議員のインタビュを聞いていると、こんな奴に一体だれが投票したのかと思いたくなる。

我々有権者は、立候補者の政治家としての資質を見ぬき、その実行手腕に自分達の将来のあるべき姿を託す、という判断を通して投票をしているのだろうか。

政治家の質や資質を問うと言うことは、そこに投票する選挙民の質を問うということに他ならない。この視点を持たない批判は天に唾吐くことに過ぎない。

天に唾吐く批判をする者達の多くは、自分は批判者には投票していないという。自分が投票をしていないことを免罪符にしているのであるが、自分が投票していないことは免罪符にはならないのだ。

民主主義の基本は、結果の責任はすべての有権者に等しくある、と言うことなのである。多数決というのは、数は力という意味では決してない。

今回は、風の談話室が大変賑やかで風が良く流れた。

この「コーナー」への皆様の投稿をお待ちしています。内容・テーマは問いません。自由な主張や詩文など何でも大歓迎です。

毎月25日が締め切りで、翌月の第一土曜日が発行です。

内容を問わず、何でも言葉にすることがふる里の文化の再発見と創造につながると思っています。

【特別企画】

打田昇三の『私本・平家物語』

巻第一 (4-1)

・鹿谷のこと

「稔（みのる）ほど頭（こうべ）を垂れる稲穂かな」という川柳があるけれども、人間はある程度の地位や身分を得ると、中途半端でも自分が偉いのだと錯覚してやたらと威張るタイプと、より高いものを目指して謙虚に努力するタイプとがあるらしい。組織の中でも下積みで徹すると怖いものが無いから威張る相手には逆らったが、後者のタイプには全面降伏するしかない。企業の方と接する職場が長かったので、日本有数の会社で副社長として活躍されたMさんが東大出の新人のときに「商売は客を大事に；が基本」と偉そうな説教をしました。数十年後、偶然に再会して「お客を大事にと教えられたことは忘れません」と言われた時には深くお詫びをするの

みで、それからは地位の高い方に対する高所恐怖症になった。

富士山頂や東京スカイツリーに観光客が押し掛けるとは一時的にしても手つ取り早く世の中を見下したような気分になれるからかも知れないと勘ぐったりするのだが、苦勞をして高い場所を極めても其処に永住と言う訳にはいかないと、何となく人生に似た様な気がして虚しくなるのである。人間は、誰でも自分なりの頂点を極めた後は一方的に下るだけの運命らしい。

栄耀栄華の果てに「平家にあらざれば人にあらず」とまで豪語した一門にも、ようやく衰退を予感させる「秋の風」が吹くようになる。「鹿谷」の章段は「殿下乗合」の騒動を受けて（それが原因で）平家が頼みとする高倉天皇の元服儀式が遅れてしまうことから書き始められる。其処には平家滅亡の自業自得が暗示され、平家に対する公然たる反抗意識が芽を吹いてくることになる。

・鹿谷（ししのたに）のこと

此の章段は、反平家運動の始まりとなった鹿谷謀議に至る話である。「鹿」と書いて「しし」と呼ばれる。ライオンと鹿とではかなり違うが、鹿谷（ししのたに）は京都の洛東地区に現存する地名である。有名な「哲学の小径」を北上して銀閣寺に行く途中から琵琶湖方面に少し入った山中になるそうで、如意岳（にようがだけ）と言う山の麓が鹿谷になる。鹿のことをなぜ「しし」と言うのかは（三）で述べたが、鹿は猪と一緒に食獣にされていたらしいから鹿島神宮や春日神社からは苦情が出るような読みである。平

家物語に登場する此の場合の鹿谷は、鹿が多く棲む谷あい場所だったのであろうと想像している。鹿は馬と共に人間に「馬鹿呼ばわり」されているが、告げ口はしないから秘密の会合を開く場所には適している。

嘉應二年十月十六日に宮中で行う予定であった高倉天皇の元服儀式打ち合わせは（三）で書いた「殿下乗合」の騒動が起こったことにより出来なくなり、延期せざるを得なくなった。摂政の藤原基房が参内できなかったからである。それでも改めて十月二十五日には後白河上皇の御所（殿中）で元服儀式の打ち合わせが再開されることになり十二月九日には、藤原基房が摂政に兼ねて太政大臣に任じられる宣旨（せんじ）内示書が与えられた。これは天皇の元服に当っては、冠を加える役目が太政大臣に限られていたからである。

十二月十四日に藤原基房は太政大臣となり同月十七日には慣例に従って太政大臣が宮中に参内し天皇にお礼を申し上げる儀式が行われた。けれども慶事である筈のところ「殿下乗合」のような不祥事があった後なので、世間の人々は苦々しく思っていた。

平家物語には「世中は猶（なほ）苦々しうぞ見えし」としか書いてないが源平盛衰記には「平家の一族が（藤原基房の太政大臣就任を）もつてのほかだと苦笑い（にがわらい）した」と書いてある。これは単に太政大臣である藤原基房の評判が悪いと言うことでは無く、平家物語では触れていないけれども藤原基房と平家との間に「殿下乗合」以外に根の深い確執が有ったためであろうと私は推測している。興味深いことなので原文からは逸れるが述べておくことにする。

この話の（二）で列記したように、平清盛には大勢の子供があり平家一門として繁盛したことは知ら

れている。特に娘たちが幸か不幸か美人揃いであり、建禮門院徳子（安徳天皇の生母）以外には平家滅亡の影響を受けなかったらしい。娘たちの母親は公式には清盛夫人（二位の尼・平時子）になっているけれども、徳子以外は製造元が本社工場では無くて各地の下請けになる。

徳子は平清盛の次女とされており（二）でも其のように書いたが前後の事情からだと思える。戸籍上の問題と言うか、徳子以外は清盛が認知した順序であろうから目を瞑って頂きたいのだが、徳子の姉又は妹になる盛子は、世に聞こえた琵琶の名手であった。勿論、美人でもあり摂政関白家に嫁いで藤原基実の正室となった。（二）で触れたように、高倉天皇の生母代理（白河院）として民間の女性では最高位を与えられている。

この女性には仁安二年（一一六七）に夫である摂政の藤原基実を失ってしまった。家系を継ぐべき義理の嫡子が未だ幼少であったために、摂政の地位は基実の弟が継いだ。その弟と言うのが平家一門に「苦々しく」思われていた藤原基房である。

摂政関白の身分と地位だけならば、嫡流の幼児に戻される可能性はあるが、世間の常で遺産相続の問題が絡んでいたから未亡人と亡夫の弟とは敵同士になる。気が利いたと言うよりも平清盛に好意的な関白家の番頭が居て、取り敢えず藤原基実が残した膨大な財産（諸國の荘園）は未亡人の盛子が相続した。その為に此の未亡人を巡り再婚の相手が誰なのか、無責任な世間の連中が気をもんでいた。盛子が何処かに再嫁しないと此の財産は平家の者になってしまう。ところが白川殿（盛子）は何が原因か、食欲が無くなり治承三年（一一七九）に亡くなっている。相続税の対象になる膨大な遺産は欲しい連中には渡らず後

白河法皇が没収したらしい。平家も藤原基房も大きな油揚げを薦に攫われたのであるから両者が相手を逆恨みするのは当然である。

時代が前後するけれども「殿下乗合」の事件が起きた嘉應二年が暮れて、嘉應三年（承安元年）の正月五日には高倉天皇の元服儀式が行われ、十三日には天皇が法皇や皇太后の許に挨拶に行く「朝覲（ちようきん）＝超過勤務ではない」という儀式があった。後白河法皇と建春門院（高倉天皇の生母・平滋子＝清盛夫人の妹）が待ちかねていて元服姿の天皇の晴れ姿をご覧になった。原本に「いかばかりらうたくおぼしめされけん」さぞや可愛らしくご覧になられたであろう」とあるが、太政大臣以下が大騒ぎして準備し贅沢を尽くして着飾っているのだから、例え庶民の子でも愛らしく見えるのは当たり前の話である。

其の年の十二月十四日には徳子が高倉天皇の許に上がった。年齢は十五歳である。此の場合、身分的な措置として平清盛の娘では無く後白河法皇の猶子（ゆうし＝名目上の養子）となっている。是により平徳子は「建春門院」と呼ばれることになる。二週間後には建春門院の身分が女御（によこ＝准皇后）とされた。さらに翌年の二月には中宮（皇后格）に昇格するのだが、此の事は平家物語原本には書いてない。また余計なことを言わせて貰えば、徳子入内の七日前には京都の町が大火事になった。「その三」でも述べたが高倉天皇が即位された一週間前にも京都で大火災があったから、悪い洒落だと「この夫婦は熱い仲になる…」

さて「平家物語」の原本に従っていても是までのことは「鹿谷」とは全く関係が無い話である。是からは、冒頭に述べたように地位の向上が何よりも大事な公家どもの話になる。その為に原本の中でも登

場人物の年代が前後すると言うか、年代的な作為が見られるらしい。この章段自体も嘘では無いにしても年代的に六年ほどの幅があるようなので、かなりの虚構が見られると言う。作者がサービスで書いたらしい。この間に後白河上皇も仏門に入って法皇となっている。

その頃（原本には「その頃」と書いてあるが史実は違う？）妙音院の太政大臣と呼ばれた藤原師長（もろなが）が、未だ内大臣で左近衛の大將を兼ねていたけれども、何らかの都合で大將を辞任することになった。其の時に徳大寺の大納言こと藤原実定が後任の大將になるであろうという噂があった。なお藤原師長は（二）で書いた「二代の後こと藤原多子」の兄に当る人物である。

また太政大臣を経験した藤原忠雅の子で花山院の中納言と呼ばれた藤原兼雅や、亡くなった中御門中納言（藤原家成）の三男で新大納言と呼ばれていた藤原成親も此の地位（左近衛の大將）をしきりに欲しがっていた。「新大納言」は複数居る大納言の中で「新人」と言う意味である。古参の者でも難しい地位に、新人がなれる訳は無いのであるが、やがて騒動を起こす此の男は、後白河法皇の側近として気に入られていたので何とかして希望を叶えたいものと、その辺の神社仏閣に手当たり次第の願掛けをしていた。

その頃は現代と違って神様と仏様が同居している時代であるから、先ず京都府八幡市男山に在る石清水八幡宮に行つて百人の僧侶に七日間かけて大般若經六百巻を省略せずに読ませた。この暴挙？には神様が仏様が知らないが石清水八幡宮の主が呆れ果てた。祝詞（のりと）でもお経でも、安売りのトイレットペーパーと違って長ければ良いと言うものでもない。何とかして読経を中止させようと、八幡宮の境

内にある摂社の甲良大明神の前の橘の樹に靈驗を顕した。其の日、男山の方から三羽の白鳩が飛んで来て橘の樹で喰い合いの喧嘩を始め三羽共に死んでしまった。

平和の象徴である鳩の死闘に驚いたのは願掛けをした藤原成親ではなくて八幡宮に仕える僧侶（神官の責任者・検校匡清法印（けんぎょうきよせいほういん）である。此の人は名門の紀氏の出で僧侶の最高位になる「法印」の位を有する人物であるから、天皇に対して直接に訴えた。「鳩は八幡大菩薩に仕える第一番の動物である。それが三羽も喰い合いで死ぬというのは、此の八幡宮にとって誠に不可解な出来事である…」と。

朝廷内で神仏の担当部署は「神祇官（しんぎかん）」と言う官庁で、格が太政官よりも上に位置するけれども仕事が少ない。石清水八幡宮の訴えに総力を挙げて占った結果「これは天下の騒ぎ」と回答した。ただし騒動の原因が藤原成親の愚挙に有ることは分かっているから「天皇には何のお慎みも必要無く、飽く迄も臣下が慎むべきこと」と付け加えた。後白河法皇の近臣である藤原成親の仕出かしたことなのであるが、それを直接的に言う訳にもいかないので「臣下の慎み」と言った。此の程度の裁定なら神祇官でなくても出来る。

藤原成親は、さすがに石清水八幡宮には行き難くなったようであるが一向に懲りることなく自分の出世願望を神仏に祈願することに専念していて今度は京都北部に在る上賀茂神社へ通い出した。それも昼間は人目があるので、夜になると中御門烏丸の宿から歩いて七夜の参詣を行った。此の神社の祭神は神武天皇の母親・玉依姫命が靈感で生んだという別雷神、つまり電圧の高い雷である。

名譽欲に眩んだ藤原成親は、神様の正体も知らずに願掛けをしたのである。通い詰めて満願の夜に宿に帰ったが寝苦しいので寝付けず、そのうちに寝付いて夢の中で賀茂神社に参詣していた。

夢であるから当たり前だが、寶殿の扉が自然に開いて、中からは恐ろしい程の莊嚴な声が聞こえてきた。御神託である。

「さくら花賀茂の河風うらむなよ

散るをばえこそとどめざりけれ」

桜の花は風に散ってしまうけれどもそれは誰にも止めることの出来ない自然の摂理であるから、成親の望みも叶わぬものである…というお告げなのであるが、左大将に成りたいという欲望で凝り固まった成親は神様の言うことも聞かない。不遜にも賀茂神社に一人の修験者を参籠させて宝殿の後に在る大杉の空洞に土を盛り上げた祭壇を築かせたのである。

そこで、仏法に云う「茶吉尼天（だきにてん）女性の悪鬼夜叉」の修法を百日間も行わせた。此の茶吉尼天は人の死を半年前に知る…と言われるから名医のような存在なのだが死者のレバーを喰うらしい。成親は雷神に諭されたのに諦めず、神社に同居している仏様に鞍替えをして祈禱を続けたことになる。

その効果と言うか偶然と言うか、正確には雷神がお怒りになったのだが、或る日、突然に天候が悪くなり、その大杉の幹に落雷があった。然も其の火が燃え上がって賀茂神社に飛び火しそうになったのである。神社の自衛消防団が走り回って此の火を消し止めたけれども、落雷の原因が怪しい修験者の祈禱にあることは明白なので、これを追い出しにかかった。ところが修験者は「我は此の社に百日参籠の大願をもって望み、未だ今日で七十五日しか経っていないから退去する訳にはいかない…」と屁理屈を言

って動かない。

困った神社側は石清水八幡宮の例にならって宮中の神祇官に訴え出た。是に対する判決が「法に任せて追い出すべし」という模範的なものだったので、これに力を得た神社側は、直ちに棍棒で修験者の首すじを叩きつけて現場から追い出し賀茂神社の領域である一条の大路から南のほうへと追放した。「神は非礼を受け給わず」と言うけれどもこの修験者の雇い主である大納言の藤原成親は、身分不相応な大将の地位を得ようと怪しい祈禱をさせ各地に迷惑をかけていた。その為に不可解な出来事が起こっていたのである。

その頃の叙位叙勲、高位への任官は本来あるべき天皇や法皇の判断では無く、また摂政や関白による人選でも無く、ただただ平家の意向で決められていたから此の時（藤原成親が必死に願望していた時期）には、近衛大将にも進む資格を有する徳大寺家・花山院家さえ大将に任官することが出来ずに、入道相国（相国は太政大臣、平清盛の嫡男である小松殿（重盛）が大納言の右大将から左大将に移り、次男の宗盛が中納言から数人の先輩たちを飛び越して右大将に任官したのは何とも言語道断のことであつた…と成親も世間も思った。

中でも徳大寺殿と呼ばれた藤原実定は清華（せいが）家系であり太政大臣にまで昇ることが出来る家柄で、当時は大納言の筆頭に居た人である。（実際には、筆頭大納言ではなかったらしいが）

名門である上に学識に優れた人物であり、なお且つ嫡男でもあつたから、今回の人事で更に出世コースとなる近衛大将に補されるべき立場であつたのに平家によって邪魔されたことになる。これは恨み深いことなので「御本人はきつと御出家なさるのでは

…」と世間の人は噂したけれども「暫くは隠居生活をして、行く末を見極めよう…」と、大納言の職も辞されてしまった。

其れを知った問題児の藤原成親は「徳大寺や花山院に先を越されたのなら諦めもつくが（自分の家格が高くないので）平家の次男に右大将を取られたのは納得が出来ない！これも平家が好き勝手なことをしているからである。どのようにしても平家を倒し自分の出世コースを開かねばならない…」とヒネクれているが立派な？決意を固めた。此の場合、右大将よりも上の左大将が平重盛に取られたのであるから、重盛を恨めば良いものを、右大将になった宗盛を恨んだには理由がある。

この藤原成親という偏屈男は藤原一族でも末流の人物で、父親が鳥羽上皇に仕えて気に入られ、何とか中納言にして貰ったのである。成親は其の末子であるから本来は藤原より麦藁（むぎわら）を名乗ったほうが似合う。それが後白河法皇に仕えて側近に取り立てられた。その関わりで妹が平重盛の夫人になるなど、平氏との繋がりがある。さらに「平治の乱」で負け組に加担して首が飛ぶところを重盛に助けられるなど、とても平氏に不満を持つ資格など無い人物なのである。原文には「…官大納言にありがた、大國あまた（多く）賜わって、子息、所従（家臣たち）朝恩に誇れり。何の不足にかかる心野心つかれけん。是ひとえに天魔の所為とぞ見えし…」と書いてある。天魔と言うより「天馬（天性の馬鹿）」である藤原成親は近衛大将の位を取られた恨みから「平家憎し」の怨念に取り付かれて、目立たない場所に密かに「私兵」を匿っていたり武器を揃えたりして平家に対する反逆の準備に余念が無かった。

やがて史上に有名な「鹿谷の密謀」が行われるの

であるが藤原成親が取り付かれた「近衛大将」のことは余り知られていないので、本文から少し逸れるが参考までに触れておくことにする。近世でも天皇の周辺を護る「近衛連隊」があり、軍人の階級として「大将」が居たけれども「平家物語」時代の近衛大将は少し違っていた。

先ず近衛大将が属したのは律令制度の内閣府である太政官府（諸省）や諸寮司などでは無く「近衛府」である。この職務は国分寺を建てさせた聖武天皇時代に置かれた「授刀舎人寮（じゅとうしやんとりょう）」が発展したものである。舎人（とねり）は天皇の身の回りを世話する役人であり、その者が必要に応じて武器を携えたのが起源であるから近衛府は「ちかきまもりのつかさ」と呼ばれて、天皇の御座所である紫宸殿（しんでん）の東西に（左右近衛府）詰所があった。宮殿内の警衛と天皇行幸の際の供奉（くぶ）が仕事である。

近衛大将の職は親衛隊の長として天皇に近侍し内裏周辺を護り行幸の際は武装してお供をする。通常は大納言、又は中納言から選ばれた者が任命されて、この職を経てから大臣などのコースを進む訳であるが、まれに近衛大将を経験せずに大臣になっても周知から格不足に見られる。官位は中納言相当の従三位であるが、官僚・公家として最も重い役目とされていた。中には大臣になつてから権威付けで兼務した者も多いらしい。出世欲に取り付かれた藤原成親が執着するのも当然であるけれども野心だけで勤まる職務では無い。

さて「馬鹿につける薬は無い…」と言われるが、自分が近衛大将になれないのは平家一門の所為だと覚った藤原成親は簡単な計算で「邪魔な平家を倒せば良い」という結論を得た。「類は友を呼ぶ」と言う

が、後白河法皇の取り巻きの一人で法成寺の事務長をしていた俊寛と言う僧が成親と意気投合した。法成寺は藤原道長が賀茂川西岸に建立した大寺院であったらしいが、鎌倉時代には廃寺になったという。その俊寛が先に述べた鹿谷に別荘を持っていたので、いつの間にか其の場所が「反平家グループ」の拠点になった。鹿谷は東山の山麓で都の人もこの辺には来ず、山麓を回って琵琶湖方面の三井寺に通じる抜け道もあるから、鹿に気を使わなければ恰好の要害の地である。

彼らは此の場所に集まって平家を倒す計画を考えていたのであるが、或る時に其の席に後白河法皇も出席をされて、少納言入道信西の息子である淨憲法印がお供をしていた。法印が僧職の最高位であることは既に述べた。父親の信西は学者ながら後白河法皇の乳母の夫として権力を振るっていたが平治の乱で源義朝らに殺されたのである。

やがて酒宴となつて、アルコールが入った後白河法皇が、何も知らない淨憲法印に「この集まりは平家を倒すための密議である…」と打ち明けられた。法皇の側に仕えている訳では無いから前後の事情を知らない淨憲法印は驚いた。父親が反乱軍に殺されていたから「平家打倒」などという途方も無い企てに仰天して「何ということを抑せられます！その様なことは直ぐに漏れるものです。さすれば上皇の御身にも災いが生じて天下の大事になります…」と騒ぎ出した。

是を聞いた首謀者の藤原成親は顔色を変えて、さつと立ち上がり其のまま座を離れようとした。そのときに成親が来ていた狩衣（かりぎぬ）当時の背広のような服の袖が、法皇の座の近くに置いてあった酒の瓶（瓶子）へいに引つ掛かつて瓶が倒れた。これを

見た法皇が「これはどうしたことか?」と言われたので、部屋を出ようとした藤原成親が、わざとらしく戻ってきて「瓶子(平氏)が倒れました!」と申し上げた。

法皇は満足されたように笑われてから、次の間に控えていた(法皇に遠慮して他の部屋で酒宴を開いていたと思われる)一味の者たちに「遠慮せずにこちらへ参つて猿楽(余興)でもするように:」と言われた。「それでは:」と最初に平判官康頼が来て酒がたつぷり有るのを見てから「おや、余りにも瓶子(平氏)が多いので、飲まないうちに酔いました:」と言えば、別荘の主の俊寛が「さて、それをば、どの様に(処分なさる?)と質問をした。判官は検非違使(司法警察)の、軍人で言えば尉官に相当する地位で、地方国司並みの官位を持つ。当然、逮捕権があるから俊寛が冗談を言ったのである。

さて、此処で(三)に書いた「清水寺炎上」の章段を思い出して頂きたいのだが、比叡山延暦寺の僧兵が清水寺を焼いた事件で流れた「デマ」が「後白河法皇の命による僧兵の平家襲撃」であった。其の様な噂を誰が流したのか?心配する法皇に対して「身分を弁えぬ平家に天が庶民の口を借りて噂を流したのでしよう:」と堂々と言い放った人物がいた。藤原師光(もとみつ)こと西光法師である。藤原を名乗っているが、一族ではない。地方の武士から法皇の警護役に成り上がり、出家して法皇の側近に伸し上がった人物である。どういう訳か平家を憎む気持ちが強かった。

その西光が鹿谷の会合にも出席して居て、俊寛が「瓶子(平氏)を、どの様になさる?」と質問したのに対して「首を取るしかないでしょう」といいながら、酒の入った瓶子の、多分、注ぎ口だと思われる

部分を壊して法皇の居る部屋に入ってきた。是を見た淨憲法印は、その浅ましさに物を言うことも出来ず、恐ろしいことだと果然としているほかはなかった。ところで此の怪しげな会合のメンバーと言うか「平家に反逆を企てる」目的で鹿谷に足を運んでいた者は後白河法皇を盟主として側近の西光、藤原成親、藤原成経(成親の子・丹波少将)、源成雅(村上源氏、出家して蓮淨、職は近衛府の中將)、俊寛僧都、中原基兼(山城国司)、式部大夫章綱(現在だと法務省の幹部職員)、そして平康頼・平佐行・惟宗信房と現職の検非違使が三名居た。その他に後白河法皇の警護を任務とする北面の武士などが加わっていた。

次の「俊寛沙汰・鶴川軍」では摂津源氏の多田行綱が誘われる。源頼朝が鎌倉幕府を開いたからこれが清和源氏の直系に思われているけれども、本来は清和天皇から貞純親王の孫である多田満仲そして鬼退治で有名な源頼光に伝わった系統の多田行綱が源氏の本流なのである。この一族は世渡りが下手で目立たなかったから、芸者さん並みに宴会に出席するまでは無名であった。

此の後、巻第一は「俊官沙汰・鶴川軍」に次いで「願立」「御輿振」「内裏炎上」と僧兵が暴れる場面が続いて鹿谷の謀議が中断したように思えるが国文学の先生方は、僧兵を抱える寺社の紛争と平家を倒す陰謀とが複雑に絡み合って重要な意味を持つと説いておられる。鹿谷で繰り返されたらしい軽薄な平家打倒計画が、一味に誘われた者の密告によって発覚するのは「巻第二」である。

目立たなかった清和源氏本流が妙な活躍をする。

ことば座「朗読教室」受講生募集中!!

朗読は演劇です。朗読は、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることです。物語や詩を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)その物語を演じることが必要です。

自分達の住むふる里を表現し、自慢する手段として、朗読は最も身近にあって適したものと言えましょう。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読表現で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。

・月二回程度の授業を考えております。(受講料月額 3,000 円)

・ことば座の脚本・演出家:白井啓治が丁寧に指導します。

連絡先 080-3125-1307(白井)

《ふる里》

アレンジ書装・書装会館料理のお店です。

(ギター文化館通り)

看板娘(大)「つらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話 06-6600-4700-000000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡 13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

会報「ふるさと風」100 号祭

9月21日、22日、23日香丸通り／みんなの広場2F

(午前10時～午後4時半 入場無料)

会報「ふるさと “風”」が9月号をもって通刊100号を迎えます。

100号を記念して、「ふるさと風100号祭」を開催いたします。

創刊号から8年4ヶ月の歩み展をはじめ、記念講演会、朗読会などを企画しております。また、会場には兼平智恵子の石岡散歩絵と常世の国の五百相の展示も行います。

9月21日(日)午後1時半:記念講演「文化力がふる里を救う」

講師:市川紀行(市川紀行・元美浦村村長・陸平をヨイシヨする会会長・劇団「宙の会」主宰。)

(講演のプロローグとして筑波山に詠んだ万葉集を小林幸枝の朗読手話舞を演じます。また講演後、市川氏を囲んでの座談会を予定しています。)

9月22日(月)午後1時半:朗読会「新鈴ヶ池物語」(朗読:白井啓治)

(朗読会後、風の会会員との座談会を予定しています。)

9月23日(火)午後1時半:朗読会「新説柏原池物語」(朗読:白井啓治)

(朗読会後、風の会会員との座談会を予定しています。)

ふるさと風 100 号祭に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>